

# 今週の為替相場見通し(2020年1月27日)

総括表		先週の値動き			今週の予想レンジ
		注	レンジ	終値	
米ドル	(円)		109.18 ~ 110.23	109.27	108.00 ~ 110.30
ユーロ	(ドル)		1.1019 ~ 1.1118	1.1025	1.0950 ~ 1.1050
(1ユーロ=)	(円)		120.41 ~ 122.36	120.49	119.50 ~ 121.00
英ポンド	(ドル)		1.2962 ~ 1.3180	1.3070	1.3020 ~ 1.3270
(1英ポンド=)	(円)	*	142.72 ~ 144.61	142.86	141.50 ~ 144.50
豪ドル	(ドル)		0.6818 ~ 0.6888	0.6825	0.6800 ~ 0.6915
(1豪ドル=)	(円)	*	74.43 ~ 75.90	74.58	74.00 ~ 76.00

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、\*印の項目はブルームバーグ。

## 1. 米ドル

市場営業部 為替営業第一チーム 逸見 久貴

(1)今週の予想レンジ: 108.00 ~ 110.30 円

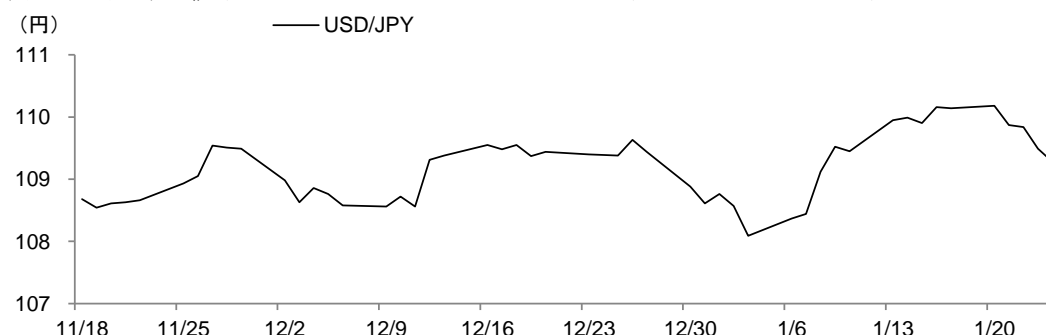
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のドル/円相場は下落。週初20日、110.20円付近でオープンしたドル/円は、NY休場のため動意乏しい展開。110.10円を中心に上下10銭程度の狭いレンジでの推移となった。21日、日経平均株価の上昇を横目にドル/円はじり高となると、一時週高値110.23円をつけた。しかしその後、中国発コロナウィルスの感染拡大を懸念し、世界的に株式市場が軟調に推移すると、ドル/円も下落し110円台を割り込む展開。翌22日、中国政府からウィルスの感染拡大を最小限に抑える方針が示されたことで、過度な懸念は後退し、ドル/円は110円台を回復。しかし、懸念払拭とまではいかず、米株が前日対比マイナス圏にて推移すると、ドル/円も下落し109円台後半での推移となった。23日、引続きウィルス感染拡大を不安視する流れは継続。アジア株が大きく下落したことや、この日発表された米経済指標の冴えない結果も相俟って、ドル売り地合いとなり109円台前半まで下落。一巡後は、WHOからウィルスに対して非常事態宣言をするほどの危険性がないことが示唆されると、ドル/円は109円台半ば付近まで値を戻した。週末24日は、米国やフランスにてウィルス感染者が確認されたことで、リスクセンチメントは悪化。株式市場が軟調に推移する中、ドル/円は下落し、週安値109.18円をつけた。終盤にかけてはやや値を戻し、109.27円付近で越週。

今週のドル/円は上値の重い展開を想定。コロナウィルスによる中国での感染者・死亡者の増加、更には中国以外の国での感染例が散見されている。このまま感染が拡大すれば、感染地域への旅行者の減少などによって経済への下押し圧力がかかることから、リスクセンチメントが悪化している状況。中国では国内外を含めた旅行を一時中止するなど、感染拡大の極小化を図っているものの、懸念を払拭するまでには至っておらず、引続きドル/円の下押し材料となろう。イベントとしては、30日の英中銀政策決定会合に注目したい。カーニーBOE総裁をはじめ英中銀高官からハト派発言が確認されており、市場での利下げ期待が7割程度まで上昇している。しかし、足下の英経済指標は比較的堅調であることから、利下げに踏み切る蓋然性は、市場が期待するほど高くはないと考えている。金利据置きとなれば、期待先行で売られていたボンドの買い戻しに伴いドル売り優勢となり、ドル/円は上値重い展開となるであろう。

## (3)先週までの相場の推移

先週(1/20~1/24)の値動き: 安値 109.18 円 高値 110.23 円 終値 109.27 円



(資料)ブルームバーグ

## 2. ユーロ

市場営業部 為替営業第二チーム 原田 和忠

(1) 今週の予想レンジ: 1.0950 ~ 1.1050 119.50 ~ 121.00 円

## (2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロ/ドル相場は週後半に高値をつける展開。週初20日に1.10台後半でオープンしたユーロ/ドルは、米国休日で参加者が限られていたことから動意に乏しい展開が続いた。21日は独1月ZEW景況感が好感され一時週高値の1.1118まで上昇した。その後、トランプ米大統領の発言に貿易摩擦の懸念が高まりユーロ/ドルは再び1.11を割り込む流れに。22日はイタリアの5つ星運動のディマヨ党首が辞任し、イタリアの政局不安からユーロ売りが進んだが、その後は徐々に値を戻し、1.11近辺を推移した。23日はラガルドECB総裁の記者会見でインフレ期待が高まる兆しが見えているとの発言に一時ユーロ高が進んだものの、中立姿勢が強調される中、ユーロの上昇は一時的なものに留まった。その後は、軟調な株式市場の動きを受けたユーロ/円の売りやドル買いを受けて、一時週安値の1.1036まで反落した。24日は、新型コロナウイルスによる肺炎感染拡大が引き続き懸念される中、1.1019まで下落。ユーロ圏PMIが50.9と予想の51.2を下振れたことも相場を下押しした。結果ユーロは1.1025で越週した。

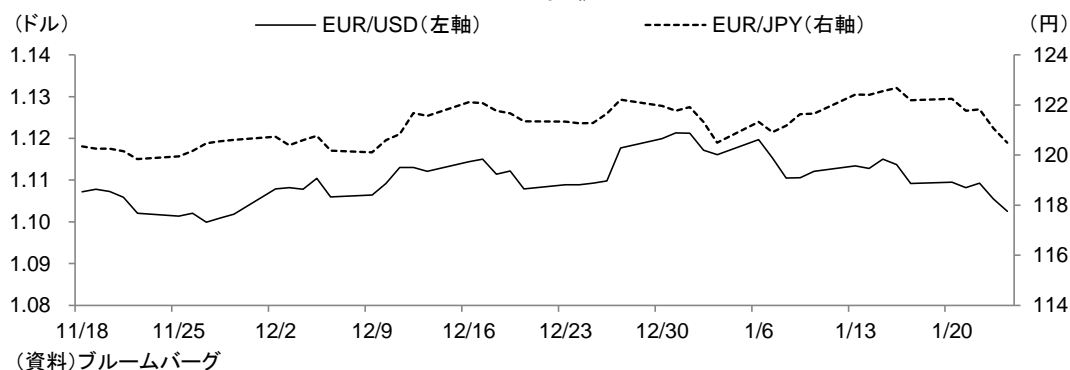
今週のユーロ相場は上値の重い展開を予想。先週23日にECB理事会が行われ、予想通り政策に変更はなかった。一方で、今後の政策の方針について広範な戦略検証が開始することが明らかになった。政策の検証は、1年かけて行い、インフレを測る代替手段や政策手段についても見直される予定。そもそも1月にECBの専務理事が2名、ドイツからイザベル・シュナーベル氏、そしてイタリアからファビオ・パネッタ氏が新たに就任。シュナーベル新理事はECBの公開市場操作を含む政策遂行の監督責任を負うことになる重要ポストだが、ドイツ出身ではあるもののECBのマイナス金利政策について、副作用があることは認めつつも擁護するスタンスを明確にしている。よって、今回の専務理事交代により、ECB理事会での政策議論はより前進的になるだろう。結果的に、今回の理事会では目新しい材料となるものはなく、相場の方向性を決定付けるものにはならなかったものの、新体制となったECB及び新理事の動きには注目したい。ラガルド総裁はフクロウ派だろうが、特にドイツ出身のシュナーベル新理事は、緩和的な政策に理解を示しており、理事会のメンバーの総意はハト派に傾いたとも取ることが出来、ユーロ相場は今後も軟調な推移を継続するだろう。

## (3) 先週までの相場の推移

先週(1/20~1/24)の値動き:

(対ドル) 安値 1.1019 高値 1.1118 終値 1.1025

(対円) 安値 120.41 高値 122.36 終値 120.49



## 3. 英ポンド

欧州資金部 本多 秀俊

(1) 今週の予想レンジ: 1.3020 ~ 1.3270 141.50 ~ 144.50 円

## (2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の英ポンド相場は、上昇。ただし、週央からの円高進行の結果、対円では、結局、週を振り返って概ね横這いとどまった。ポンド上昇の主因は、英中銀による1月利下げ観測の後退と言って差し支えなからう。21日に発表された英雇用統計は、12月失業保険申請件数の急減などから「雇用市場は比較的健全」と受け止められ、ポンドの上押しを助けた。ポンド上昇に一段と弾みがついたのは、翌22日に発表された英産業連盟(CBI)の1月景気動向(楽観)指数が想定外的大幅上振れを示した時。従来、大きく市場の関心を集めることは稀だった同指数だが、今回は、昨年末の総選挙後の景況感の変化を読み取る最初の数字として相応の注目を集めたようだ。しかし、前後して、新型コロナウイルスの蔓延に対する警戒感の高まりが、リスク回避の円高進行を促し、ポンドは特に対円で急反落、対ドル、対ユーロなどでも上値を押さえられた。24日、総選挙後の英景況感を示す指標として、上述CBIの景気動向指数よりも注目を集めた英1月製造業・サービス業PMI暫定値が発表され、市場予想を明確に上回る改善を示した。ポンドは対ドル、対ユーロで、それぞれ週の高値となる1.3180、0.8390まで続伸したものの、程なく頭打ち。並行して、一時は8割方まで織り込まれた1月30日の英中銀金融政策委員会における25bp利下げ観測は、6割前後まで低下したものの、週引けにかけ、ポンドは軟調気味の推移で取引を終えた。

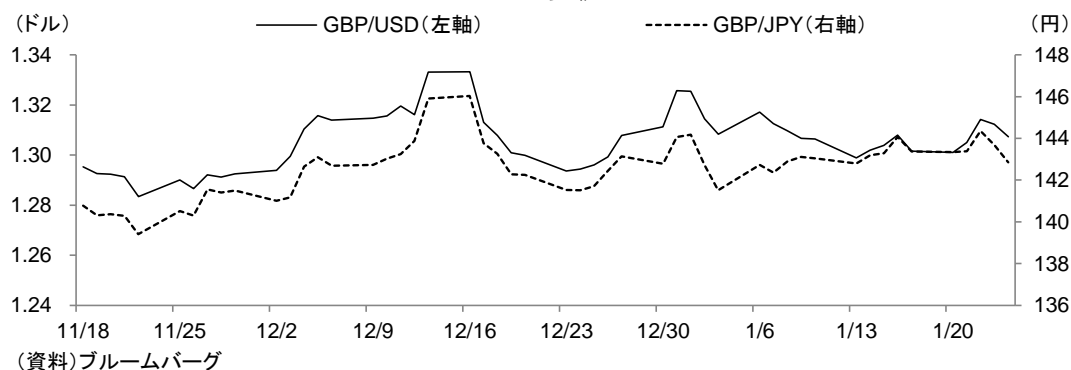
今週の英ポンド相場は、30日(木)の英中銀金融政策委員会までは、結果待ちの様子見、結果発表後はその決定次第となろう。25bp利下げの織り込みが、低下したとは言え6割前後残っているということは、利下げが見送られれば6割が驚くことになり、利下げが実施されれば4割が意外感を抱くことになるはず。いずれの結果にも、ポンドは相応の値幅を示すのではなかろうか。ただ、総選挙結果がEU離脱の是非に関する不透明感を払拭した途端に、自由貿易交渉の成否を心配するような相場なので、仮に利下げが実施されても、早々に追加利下げの是非/時期をうかがう展開が始まろうし、逆に利下げが見送られても、それで利下げに対する関心が薄れるようなこともなからう。当座の反応としては、利下げはポンド売り、利下げ見送りはポンド買いという素直な反応が見込まれるものの、それぞれ長続きはしないのではないかと。利下げの有無そのものに関しては、まず、「金融緩和余地は十分にある」という議論をしたかっただけのカーニー総裁に、そもそも早期利下げを推す意図は乏しかったと考える。テンレイロ委員とブリハ委員は、それぞれ英経済指標の改善が見られなかった場合の利下げ投票を予告したが、1月PMI暫定値の改善を理由に、利下げ票を見送る可能性が高まったと考える。従来からのソーンドース、ハスケル両委員の利下げ票に、仮にテンレイロ、ブリハ委員の2票が加わったとしても、利下げに必要な5票には届かないし、テンレイロ委員、ブリハ委員のいずれか、もしくは両者が利下げ投票を見送る可能性も十分に考えられよう。したがって、今週の利下げは見送られる蓋然性の方が高いものと見込む。

## (3) 先週末までの相場の推移

先週(1/20~1/24)の値動き:

(対ドル) 安値 1.2962 高値 1.3180 終値 1.3070

(対円) 安値 142.72 高値 144.61 終値 142.86



## 4. 豪ドル

アジア・オセアニア資金部 シドニー室 川口 志保

(1) 今週の予想レンジ: 0.6800 ~ 0.6915 74.00 ~ 76.00 円

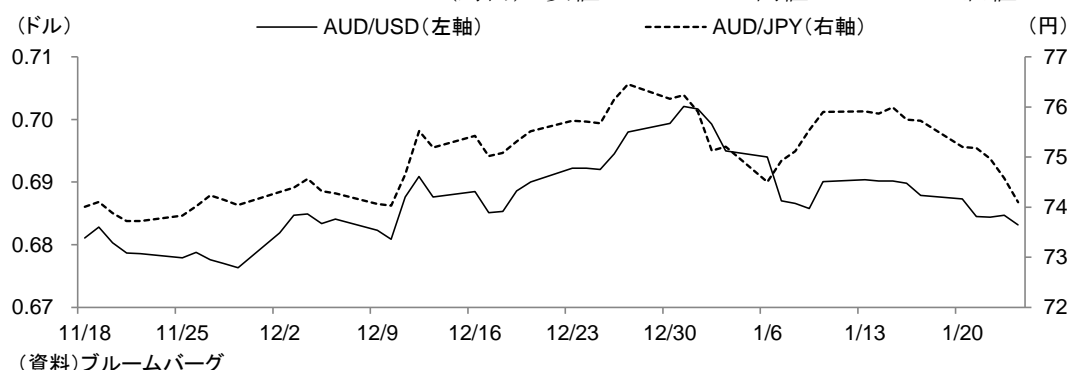
## (2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週20日(月)豪ドルは月曜は米国休場の中、動意薄。豪ドルは特段ヘッドラインはないもののロンドン時間には0.6890近辺から0.68半ばまで下落。21日(火)世界各地で「新型コロナウイルスの感染例確認」との報道でアジア日中は徐々にリスクオフの流れに転じ、シドニー正午には株式先物が急降下。この値動きが各アセットに波及。豪ドルはロンドン時間にかけて0.68台後半から半ば割れまで一旦下落した。但しNY時間に米金利が下落する場面では豪ドルが0.6875近辺まで上へ戻す展開に。しかし、長くは続かず、NY引けでは0.68台半ば割れまで再び下落。22日(水)は中国武漢などで旅客機や公共交通機関の運休をする等、新型コロナウイルス感染拡大の抑制策を進めているとの報道などで警戒感が後退し、一旦リスクオフの動きが和らいだ。豪株指数は最高値更新も、豪ドルは昼に一旦0.6830割れまで下落。その後は値幅を30pipsに抑え、NY引けは前日とほぼ同水準で推移。米12月中古住宅販売件数が予想を上回り、約2年ぶりの高水準となった。在庫難にもかかわらず低金利が引き続き需要をサポートしている模様。米経済に対する成長期待からドル買いが再燃。23日(木)は堅調な豪雇用統計で0.6880近辺まで上昇も再度リスクオフの流れになりロンドン16時にかけては0.6830近辺まで戻した。12月豪雇用統計はソフトな市場予想に反して思いの外強い数字。正規雇用者数変化は若干のマイナスとなったものの、雇用者数変化は前回値が下方修正されたにもかかわらず、予想28,900人を大きく上回る増加となり、失業率も0.1%ポイント改善し5.1%となった。これを受けて30日物銀行間金利先物から算出した2月の豪政策金利の利下げ織り込み度は60%から25%となり、インプライド金利も0.60%から0.69%へ上昇。2月の政策金利決定会合の見通しは市場の大半が据え置きと見ている。また、連邦政府は来年度予算案に民間事業の投資刺激策を盛り込む計画をしており、長期的にみても利下げ懸念がかなり後退したとみられる。24日(金)シドニー時間は豪ロングウィークエンドを前に調整や実需玉等が散見されたが特段の動きは見られなかった。

今週は中国旧正月もあり、全般的に薄商いが予想される。豪ドルは年初から続落してはいるが直近はIMM通貨先物の豪ドルショートポジションが徐々に軽くなっており、豪ドル下値切り下げスピードもやや緩やかになっている。足元の動きとして、各レポートで豪森林火災の影響として生態系への悪影響、大気汚染でスポーツイベント等の一時中止、観光産業の損失、放火犯の増加、保険金請求の増加、停電等に関連する経済損失の推計がでているが、再建支援として連邦政府はA\$20億を被災者支援に、A\$6,000万をインフラの再建に充てると決定。また、NSW州政府は今後2年間でA\$10億をインフラ復旧に充てると発表している。短期的にはGDPの約0.2%と推計されている経済損失を受けて落ち込みは予想されるものの、長期的にはこれらの再建計画は経済刺激支援としても働く為、豪経済成長に対して比較的楽観的な見方が広がると予想する。合わせて豪12月雇用統計の内容を以って2月の政策金利は据え置きが広く予想されている為、豪ドル下げはひと段落すると見る。但し、29日(水)に発表予定の豪CPIには注意したい。この他、国際通貨基金(IMF)の発表した最新の世界経済見通しによると2020年は通商関連の脅威や中東での緊張が続くリスクはあるものの、世界成長率は3.3%(前年2.9%)に改善との予測。また製造業と貿易の底入れの兆候が見られると見込まれており、豪経済の外部環境からの影響は改善されるとみる。

## (3) 先週末までの相場の推移

先週(1/20~1/24)の値動き: (対ドル) 安値 0.6818 高値 0.6888 終値 0.6825  
(対円) 安値 74.43 高値 75.90 終値 74.58



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。